

雑誌『赤い鳥』における戦争観

—— 創刊一九一八年から休刊一九二九年までの傾向 ——

金 森 友 里

はじめに

雑誌『赤い鳥』は、これまでの児童雑誌の通俗性を打破し子どもの純性を保全開発するという主催者・鈴木三重吉の高い意識の下、一九一八年七月に創刊された。—それまでの巖谷小波に代表される明治期の説話的な「お伽噺」の世界から、近代的な童心主義にあふれた芸術的童話へと昇華させる先駆的な役割を果たし、本誌に刺激されるように一九一九年には『おとぎの世界』『金の船』（のち『金の星』と改題）、一九二〇年には『こども雑誌』『童話』、一九二一年に『檉の木』、一九二二年には『コドモノクニ』や『金の鳥』『オヒサマ』といった雑誌が次々に創刊された。二今でも本誌に対する評価は高く、日本近代児童文学史に不滅の名を残している。『赤い鳥』がここまでの地位を獲得することができた背景として、大正デモクラシーを受け児童教育運動が盛んであったことが挙げられる。より自由で芸術性のある新教育を求めた教育現場と、『赤い鳥』の提唱するモットーが合致したため、子どもだけでなく教育的指導者も読者として取り入れることに成功したのである。

このように大正期の児童文学界において極めて重要とされている本誌であるが、今日までの研究で掲載作品の傾向を述べているものはほとんどない。幅広い読者がどのような作品を求めていたのか、特に教育者に受容されていたという事実注目し、『赤い鳥』における教育的側面について今一度考察を行いたい。その上で、創刊された一九一八年にはシベリア出兵が決まったこと、一九一四年から続く第一次世界大戦もいまだ続いていたこと、そして『少年倶楽部』に見られるように国家主義的思想が児童雑誌に着々と入り込んできたことから、本誌掲載作品における戦争観について明らかにすることを目的とする。

なお、本稿では『赤い鳥』創刊から一九二九年三月の休刊までの一二七巻を分析対象とし、以下の規定に従う。①「鈴木三重吉・選」や「北原白秋・選」といったように選集作品がまとめて掲載されているものや、読者からの投稿作品、「通信」等の後書き欄、表紙絵・口絵は除く。②号を跨いだ連続作品においては、まとめて一作品とせず、一号分を一作品と数える。③作品のジャンルは『赤い鳥』

CD-ROM版』(大空社、二〇〇八年)を参考にし、童話、脚本、科学読物、体験記、童謡・詩・曲、絵話・漫画、地方紹介、遊戯法、研究紹介、図書紹介に大分する。④テーマの分類は以下のように規定し、一番強く表れている主題を選ぶ。遊び方や遊具の作り方を記したものは《遊戯》、因果応報や教え諭す内容のものを《教訓》、普段の生活を描写したものは《日常》、見たままの景色を表現したものは《風景》、こっけいな話を《笑話》、機転の利いた話を《頓知》、主体が困難に立ち向かう様子を描いたものを《冒険》、家族愛やきょうだい愛については《家族》、友人間の情愛は《友情》、男女の恋物語を《恋愛》、歴史や民俗については《人文科学》、人文科学の派生として仏教やキリスト教などを扱うものは《宗教》とし起源創成期における神々の話を《神話》、数学や生物学また医学や化学は《自然科学》、工学や建築学は《応用科学》、一九二三年の関東大震災など自然現象の被害については《災害》、幽霊などに関する怖い話を《怪談》とする。

一

『赤い鳥』が始まった頃、「欧米でおこった児童中心主義的な教育思潮は、エレン・ケイの『児童の世紀』が翻訳されるなど、日本にも流れこみ、子どもの興味や自発性を尊重する教育改革の動きとなっていく」^四という、いわゆる大正自由教育運動が盛り上がりを見せていた。そのため、『赤い鳥』が提唱した《芸術として真価ある作品》を創作する主張は、まさに、当時の教育現場における芸術性のある教育を求めようとする動きと合致していた^五ことから本誌

は、教育的指導者という読者層の獲得に成功する。事実、経済的な面で比較的余裕があり子どもが家庭教育に関心のあつた新中間層からの指示が厚く、親や学校教師といった大人読者が大きな比重を占めていた。

しかしながら、『赤い鳥』の子ども読者の読者行為には、教育者としての学校の教師と親の教育意識の影が色濃くあらわれ、子ども自身には自発的に読む情熱があまりなかった^六という指摘もあるように大人読者から歓迎を受けた本誌ではあるが、当時、児童雑誌は俗悪で読んでも無駄なものという認識が一般的なものとしており、教師と親に勧められる雑誌はめつたになかった。『赤い鳥』が子どもよりもむしろ、教育者に積極的に取り入れられたという点を踏まえて、なぜそれまでの認識を打ち破ることができ、指導書として勧められる雑誌になりえたのか、『赤い鳥』に描かれた教育的側面について考察したい。

一・一

一卷から一二七巻において、作品は以下のように構成されている。童話一一九八作、脚本七三作、科学読物一九一作、体験記二二作、童謡・詩・曲五九四作、絵話・漫画一七作、地方紹介六四作、遊戯法二四作、研究紹介八作、図書紹介三作であり、その合計は合計二一九三作にも及ぶ。主催者・鈴木三重吉は作家であり、雑誌に寄稿する作家たちの文章に手を加えるほど童話に力を入れていた。セマタ参加者の北原白秋は、三重吉に誘われ『赤い鳥』に携わつたことがきっかけで童謡を一つの詩形と捉えるようになり「子どもの書く

詩（児童詩）を発見したのは、『赤い鳥』の北原白秋^{一八}と言われま
で、彼もまた童謡・童詩に熱心になっていた。したがって、必然
的に童話や童謡関係の作品数が多くなっている。

童話、童謡の次に多いのが科学読物である。戦前の日本において
科学読物の出版ブームとされる時期は三度あるが、当時、一九一七
年から一九三〇年は二度目のブーム期にあたる。一度目のブーム期
は福沢諭吉『蒙訓究理図解』がきっかけで西洋近代科学に注目が集
まった一八六八年から一八七四年のことであり、三度目は第二次世
界大戦に伴い科学振興への接近が行われた一九四一年から一九四四
年のことである。このように、それぞれブームになるための背景が
あり、二度目のブームとなった背景には大正デモクラシーの子ども
中心主義思想と第一次大戦に絡む科学振興とが存在していた。「実は、
この三つの時期は、社会の趨勢として科学（科学教育）を重視した
時期ともびつたりと重なるのである。つまり、社会が科学を必要と
したとき、多数の多様な科学読み物が出版され、そのような科学読
み物が多数出版されているときには、科学や科学教育が重視されて
いるのである。」^九科学読物を多数載せていた『赤い鳥』は、当時の
需要のあつた学問を提供したという点で教育現場に受け入れられや
すかつたのである。

なお、掲載作品の主題を序章で示した分類に従って振り分けると、
人文科学一七六作、自然科学一二三作、応用化学二一作となる一九
一八年に理科教育研究組織が誕生し低学年理科特設運動が盛んにな
るなど、特に時代は化学工業や機械工業、つまり「理化学の思想」
を求めていた。しかし、『赤い鳥』では理化学だけでなく、人文科学
も紹介することで総合的な学習を目指そうとしていることが伺える。

鈴木三重吉による綴り方指導は、子どもが実際に参加する手法と
して一九一八年九月出版の『赤い鳥』第一巻第三号から始まってい
る。「文壇の作家の作品を文章の典範とし、また自らの童心主義を童
話制作上で実践する若い作家を擁し、さらに作文指導を推し進める」
一〇という方針を持った三重吉による指導の形式は、綴り方投稿欄の
選と選評によって行われた。

この綴り方指導では、嘘飾のない純朴な文章を良いものとし、子
どもに「ありのまゝ」書く事を求めている。「ありのまゝ」を書く、
つまり写生文は、認識の表現であり自己の表現であると三重吉は考
えており、写生文が向上することは認識主体としての自己の向上に
繋がるとした。一方、この指導は、「文章表現の能力に限定されたも
のであるとし、教育的な観点での評価は低い」一二と言われている。
これは、購買低下を抑えながらも水準を落とさないために『赤い鳥』
を会員制にしたことで、読者へ対応することを重視するが故に、充
分に創作や作家育成に力を傾ける事が出来なかつたのである。二二

しかしながら、投稿作品に対する添削は休刊に至るまでの十二年
間、毎号欠かさず行われている。「詳しく調査・考察するほど、当時
の論文や先行研究における歴史的評価ほど、日々の教育実践のレベ
ルではアンチ『赤い鳥』志向は具体化・先鋭化してはおらず、むしろ
親和的でさえあつた」一三こと、そして「東京（中央）から発信さ
れる魅力ある言語文化として、綴り方や児童詩は全国各地の学校・
教室において豊かに享受され、それに刺激を受けて全国各地から綴
り方や児童詩が『赤い鳥』に投稿された」一四こと、そして『赤い

鳥』の文芸世界から豊かに学びつつ新しい指導実践を模索していた人物が多かった。二五ことから、教育現場への写生文の浸透に少なからず影響を果たしたことは確かである。

一一三

全ての作品のうち、童話は一九八作あり一番多いジャンルとなっている。これらの主題を分類すると表一のようになる。童話のテーマは教訓が一番多く、次に冒険、そして笑話が続いている。教育をテーマにする作品には、因果応報や勧善懲悪を題材とし悪い事をしてはいけないと教えるものや、素直さや優しさの重要性を強調するために正しい心を持つ者が幸福を掴むなど、子どもの精神面での成長を促すものが多い。このように、教育者に求められた原因は掲載作品のテーマ性からも読み取れる。

表 1. 童話におけるテーマの分類

教訓	294	戦争	35
日常	82	冒険	239
風景	4	人文科学	71
笑話	189	宗教	18
頓知	23	神話	13
遊戯	0	自然科学	7
地方紹介	0	応用科学	0
家族	118	災害	5
友情	79	怪談	11
恋愛	10	研究紹介	0
		計	1198

さて、鈴木三重吉が寄稿者の作品にも手を加えていたことはすでに述べた通りであるが、三重吉はどのような採用基準を持っていたのだろうか。一つ目の基準は、「長さは四百字詰め二十枚と規定しながら、実際採用されたものは十枚以下の短い作文風のものが多かった」二六ということにある。確かに、「一作品のページ数の平均は七、三枚であり、長くても二〇枚を超えるものはなかった。そして二つ目の基準として、飾り気の多い文章ではなく、普通の口語をそのまま使うような純真簡朴な表現を重視していた。

最後に、三つ目の基準として、生活童話・学校童話であるということが挙げられる。三重吉は、それまでの昔話的なものから、現代的な作品に主流を移していったのである。七作品の舞台については森や海といった自然空間を舞台にした作品は三五〇作である一方で、家や町など生活空間を舞台にした作品はその二倍以上の七二二作に及ぶ。そのうち、学校を舞台とする作品は四四作あった。その他、戦場が二八作、天界・地獄が八作、不明なものが九〇作であることを見ても、生活空間で話が展開する作品が圧倒的に多いことが分かる。また、「むかしむかし」や「今から百年も昔」というように昔話風なものに関しては、一九一八年から二年毎に区切り考察すると、一九一八年から一九一九年の二年間では一五五作品中九五作、およそ六割が昔話的作品であった。しかし、一九二〇年から一九二一年では二〇一作中昔話風なものは七八作しかなく、全体の四割程度にまで減っている。その後割合は四割を超えることなく、一九二八年から一九二九年では一八六中昔話風のものだった二七作で三割を下回っている。

また、三重吉は童話を少年期の夢の続きと捉えており、脆弱な体

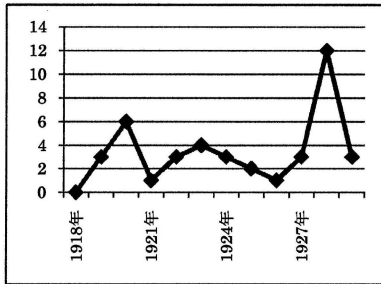
格で軍人になる夢を諦めたことから、男性的な世界に憧れを抱き、戦争や英雄のエピソードを好んで紹介した。そこで、童話の主人公を調べると、男性が主人公の作品は七三五作、女性が主人公の作品は一四四作、王族や天皇といった高位の人物が主人公になっている作品は六七作、性別不詳が主人公なのは三三作、神や妖精など人外のものは一四四作、動物や虫・魚といった生物は一五二作、植物は十作、無機物などその他のものは三一作、主人公が不明のものが二作であった。したがって、男性を主人公としたものが圧倒的に多いことが分かる。軍人や英雄の話を好んだ三重吉であるが、『赤い鳥』の作者たちにとって戦争とはどのようなものであったのだろうか。当時の社会背景、他雑誌の童話観にも触れ、『赤い鳥』の童話に現れる戦争観について次章で考察を行いたい。

二

序章で、『赤い鳥』創刊当時はまだ戦争の最中にあつたことは述べたが、これらを受けて日本の文学界には戦争に対する様々な意見が生まれた。一つは、反戦的意見、第二に戦争の不可避性を強調し評価する意見、そして第三に第一次大戦で多数を占める傍観的な意見である。第一次大戦以前の日清・日露戦争では、反戦的作品より戦意高揚や戦争協力の作品の方が割合を占めていたが、一九一〇年代から二〇年代にかけて反軍・反戦的作品の数が多くなる。これは、第一次世界大戦の影響からドイツの軍国主義から民主主義を守るというデモクラシー思想が高まりを見せたこと、また戦後の不況から軍縮が求められたことが原因となっている。一九

さて、『赤い鳥』の童話において、戦争をテーマとした作品は四一作ある。大正七年といえれば第一次世界大戦後の比較的平和な時代である。三〇之言葉通り一九一八年は〇作である。しかし、一九二〇年には六作になり、一九二八年には十二作に増えている。これらの作品を中心にし、さらに、戦争を主題としていないものでも戦争観が強く表れている作品を加え、戦争肯定派の作品として六作、戦争否定派の作品として二三作の考察対象を選んだ。時代背景を受け、『赤い鳥』でどのような戦争観が描かれているのか見ていきたい。

図 1, 戦争を主題とした作品数の推移



注 縦軸は戦争をテーマにした童話の数、横軸は 1918 年から 1929 年までの年代を示している。

二一

反戦作品の多かった一九一〇年代、一九二〇年代であっても、戦争や軍隊に対して肯定的もしくはプラサスイメージを与える作品は

『赤い鳥』にも存在する。喜多信太郎「營口來襲」、喜多信太郎「騎兵斥候」、宇野四郎「劍狭仙女の手柄」、第鈴木三重吉「負傷兵」、平田アヤ子「戦争」、笹本縫藏「騎兵斥候の話」の六作品である。

喜多信太郎「營口來襲」は、第八巻第四号（一九二二年四月一日発売）に掲載され、『赤い鳥』では始めて戦争に対して肯定的な姿勢を示した。日露戦争の時、日本軍の後方・營口（中国遼寧省南部の港灣都市）では必要な物資が蓄えられていた。ロシア軍は營口の守備が薄いとの情報を得、一九〇五年一月八日ミスチェンコ少将率いる大部隊の騎兵団を差し向ける。少佐として營口に滞在していた「私」の元にその情報が届いたのは三日後のことだったが、「私」はすぐに指揮を執り陣形を組む。夜襲を決行すると見事成功し、ミスチェンコ部隊は全員撤退を余儀なくされた。「私」はもとから敵軍が町中まで攻めてくることはないと考えていた。町中は畏をはりやすいし動きにくい、実際にミスチェンコも、獐猛な部下が略奪をする危険性から町深くまでは入らないつもりでいたというお話である。これは戦争の体験談を語ったものであり、勇敢で冷静な日本兵の様子が描かれている。軍人は勇敢でありつつも知的であるという、プラスのイメージが感じられる。

これと同じように、体験談でもって軍隊のイメージアップを図っている作品が二つある。第十巻第五号から第六号（一九二三年五月一日、同年六月一日発売）二号に渡り連載された喜多信太郎「騎兵斥候」と、第二二巻第一号（一九二八年七月一日発売）に掲載された笹本縫藏「騎兵斥候の話」である。「騎兵斥候」は日清戦争での、「騎兵斥候の話」は日露戦争での斥候の活躍についての話であり、どちらも危険を冒しながらも任務を全うする日本兵の勇ましい様子

のみが書かれている。

また、第一五巻第四号（一九二五年十月一日発売）に掲載された鈴木三重吉「負傷兵」では、日本兵ではなくフランス兵の勇姿を述べている。一八〇五年十二月二日アウステルリッツの戦いで、フランスはオーストリア・ロシア連合軍に大勝を治めた。その翌朝、ナポレオン率いるフランス軍が、凍った湖の中に負傷したロシア兵を見ず。フランス兵は冷たい湖に苦戦しながらも身を挺して救助を行ったというものである。三重吉が英雄の物語を好んで紹介したと事については第一章で述べた通りであるが、軍人に対して好感を持っているような話になっている。

以上四つの作品は軍人に対して肯定的であるが、第一五巻第三号（一九二五年九月一日発売）に掲載された宇野四郎「劍狭仙女の手柄」は、軍隊の強化を主張している。舞台は昔の中国であり、神が謀反を止める手助けをするというのが主な内容である。そして、作中で神が、政治だけでなく軍事も同じように強化することが大切だと述べている。日本は一九〇二年日英同盟を締結した事で大戦に加わるが、日本の政治指導者たちは戦争の見通しについて見解が一致していなかった。大隈内閣の外相加藤高明は強引に参戦意見を推し進め、結果、政府内部と軍部の混乱を招いてしまう。三したがって、政治と軍事の両方でもって初めて堅固な国が作れると当時の政府に対して進言しているとも読み取ることができる。

最後に、第一八巻第一号（一九二七年一月一日発売）に掲載された平田アヤ子「戦争」についてだが、この作品は母が子に過去の思い出を話している形式で進められ、日露戦争を題材にしている。この作品で注目したいのはジャンルが「低年読物」なことである。戦

争の残虐性や悲惨さが一切排除されており、戦争を友好的なものとして印象付けている。

このように、戦争・軍人を肯定する作品は軍隊の良い部分のみを取り上げ、戦争の悲しみや残虐性を一切排除しているという傾向がある。また、実際の体験記でもって軍人の勇敢さや冷静さを伝えイメージアップを図っている作品が、全六作中三作と半数を占めているのも特徴的である。

二二二

一九一〇年代から二〇年代にかけて反軍・反戦的作品の数は多かつた。しかしながら、そのような傾向は一九三〇年代になると様変わりを見せる。治安維持法などにより言語の自由を奪われ、「げつして反体制的ではなかった鈴木三重吉の作品ですら伏字化されたのだから、反資本主義、反地主制、反戦と、あらゆる意味で反体制的な左翼文化運動が徹底的に弾圧」^{三三}された。これは、児童文学においても例外ではなかった。また、この頃になると戦意高揚を狙う雑誌が登場し始める。一九三〇年には発行部数六七万部^{三四}と、子どもに非常に人気の高かった『少年倶楽部』が大正末から戦争をテーマとする作品を増やし、ついに煽情的軍国主義への道を辿ることになる。したがって、低俗な娯楽性と反動的教化性が遅れた国民意識をとらえていたことで、売上部数に関しては『赤い鳥』に勝っていたにもかかわらず、教育者の求める指導書にはなり得なかった。^{三五}

それでは、『赤い鳥』の反戦作品について見ていきたい。本誌において、反戦思考が読み取れる作品は全部で二三作あるが、一番多く

反戦作品を書いた人物は鈴木三重吉であり、五作もの作品を残している。三重吉は戦争肯定の作品も一作書いており、第一次世界大戦に対しては「まだ対岸の火事視的な態度がある」^{三五}と言われているが、確かに戦争に対して関心を抱き、また問題視していたと分かる。

初めて三重吉の反戦作品が掲載されたのは、第五卷第一号（一九二〇年七月一日発売）のことである。「間諜」と題されたその作品は、一八七〇年の普仏戦争を題材にしている。この時、パリはドイツ軍に包囲されており、国民の食べ物は無くなり、皆乞食のようになっていた。砲台の煙を見たパリの時計屋は「あゝして両方で人殺しのシツクラをするんだ。どっちも馬鹿だね、戦争なんかする奴は。」と嘆く。この台詞が実に印象的な作品である。

二つ目は、第八卷第一号（一九二二年一月一日発行）掲載の「従卒イワン」である。十九世紀初め、ロシアはコーカサス地方をめぐって蛮族と戦いを繰り返していた。キャスカンボー少佐は部隊の指揮を執っていたが、反逆者により従卒イワンとともに捕虜となる。イワンは脱走を謀り、門番をしていた親子三人を殺す。彼はまだ二十歳になるかならないかの若者で普段は穏やかな人間だったため、少佐はその無情さに恐ろしくなる。

三つ目の、第十年代四号（一九二三年四月一日発行）掲載「勇士レグルス」は、およそ二二〇年前の羅馬の英雄を扱ったものであるが、アフリカ派遣の際に突如豊かな他国で略奪と暴行を繰り返すという、英雄らしからぬ行動が見受けられる。いくら祖国を守った英雄であっても、戦場においては相手に慈悲をかけず乱暴を働いていたということから戦争に批判的な態度を感じる。

四つ目は、第十二卷第六号（一九二四年六月一日発行）掲載の「最

後の課業」だが、これも「間諜」と同じく普仏戦争が題材となっており、アルザス・ロレーヌがドイツ領になった頃の話である。それまで母国語であったフランス語を習うのは今日までだと告げられた少年は、今までになく授業に真剣になる。先生はフランス語の美しさを語り、「すべて国語といふものは、牢屋の戸を開ける鍵である、いかなる国民でも、自分の国語といふものを失はない限りは、たとへ一時は他の国民に征服されてゐても、いつかは、必ずよみがへることが出来るのだ」と言い聞かせる。戦争によつて、自国の文化を奪われる深い悲しみと母国愛が表現されている。

最後は、第十九年第五巻から第二十巻第一号（一九二七年十一月一日から一九二八年一月一日発行）の、三ヶ月間にわたり連載された「勇士ウラルター」である。これは軍人でも何でもない男が、自分の体を犠牲にしながら諜報活動を行い、陰ながら母国イギリスを助けるという内容になっている。隠れた英雄の存在を主張しているのは、一見すると戦意高揚にも受け取れるが、この作品が戦争に否定的だと判断したのは、主人公が拷問される描写が児童雑誌には余りにも残酷で痛々しいものであるからである。以下に本文を抜粋する。

彼等は乞食が本当につんぼであるかを試すためにその耳のそばで、つゞけさまに銃弾を発射しました。乞食はその銃声も聞こえないやうに、ぼんやりと立つておりました。しかし彼等はなほ不安がつて、彼を野砲のそばに立たせ、二十発もの銃弾を打ちました。そのために彼の鼓膜はやぶれ、耳と鼻から、だら／＼と血が流れ出ました。それでも彼は石のやうに、ぎくともし

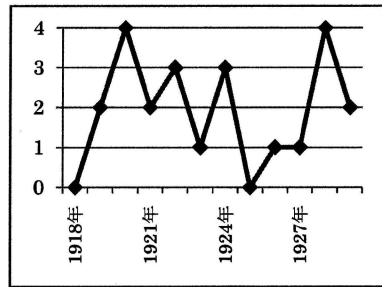
ずに直立しておりました。これで、つんぼであることだけはトルコ兵にも分かりましたが、でも口は聞けるかも分からないと、なほ疑つて、赤熱した鉄棒でもつて、彼の肉をこすりましたそれから両手の指の生爪をすつかりはぎとりました（略）そのときには彼の左手は、指先の傷口から毒がはいつて、手くびの上まで腐りおちてゐました。

三重吉による反戦作品は、すべてが海外に目が向いていることが分かる。第一次大戦において日本が参加したのは短期間の事であり、国力を総動員して行つた戦争ではなかつた。そのため、日本よりもむしろ海外を重視していたとも読み取れる。第一次世界大戦の経験から生まれた世界的な戦争否定と国際協調への動きもある。しかしそういう思想は、必ずしも国民大多数のものではなかつたのである。少数者のものだったからこそ、いつその価値があつた^{二六}ということから、三重吉もまた価値ある少数者だったと言える。しかし、彼は第二章第一節で見たやうに軍人に対して肯定的な作品も書いている。世界的な戦争を意識しつつも、一方で個人の勇姿を称賛することから中立な視点で戦争を捉えていたことが分かる。

二一・三

第二節において、『赤い鳥』の責任者であつた鈴木三重吉が中立の視点でもつて世界的戦争を否定していたことが明らかになつた。次に、三重吉以外の反戦作品を年代毎に考察する。

図 2, 反戦作品の年代別推移



注 縦軸は反戦作品の数、横軸は 1918 年から 1929 年までの年代を示している。

一九一九年における反戦作品は、第二巻第五号と第六号(同年五月一日、六月一日発行)掲載の袖利淳「草木大合戦」、第二巻第六号掲載の馬場孤蝶「鼻の相談」の二作品である。「草木大合戦」は、美しい桜姫を奪い合つて草木が戦争を始めるが、桜姫は自分のために多くの命が失われたことを嘆き、自分の罪を滅ぼすために出家をする。また「鼻の相談」は、トルコのマアムウド王の戦争好きのために国内が疲弊するが、一生懸命に戦争をしても荒れ野を増やすだけだと気づいた王はその後平和の政治を摂り国は豊かになったという話である。どちらも、多数の命が失われる戦争の哀しさや無益さを語っていることから反戦作品と言える。

一九二〇年は一九二八年と同じく、反戦作品が四つと一番多くなっている。第四巻第五号(同年五月一日発行)小島政二郎「若いコサツク騎兵」では、一八〇五年のオーステルリッツの戦いに出陣し

たナポレオン軍の将校が、戦で子どもを失った親の気持ちを想い悲しみに暮れる様子描かれている。第五巻第一号では、第二章第二節で述べた鈴木三重吉「間諜」が掲載された。第五巻第四号(同年一〇月一日発行)の水島爾保布「チビ子、凸坊、三本足」は、戦場で暇を持て余していた兵士が自分の身体に風を見つけ、小さな命が失われなかつたことを喜ぶ話である。第五巻第四号から第五号(同年十月一日、一二月一日発行)に連載された中村星湖「ある巡査の娘」は、出だしが「地球の上に住んでをる人間の半分過ぎが気違ひになつたやうに見えた、あの世界大戦」で始まっている。以上から、一九一九年から一九二〇年においては、道徳的な観念から戦争を否定する作品が多い。

一九二一年になると、戦争が秘める悪そのものに注目する作品が増加する。また、この時初めて第一次世界大戦を題材にした作品が登場する。第六巻第一号から第六巻二号(同年一月一日、二月一日発行)掲載の芥川龍之介「アグニの神」では、上海の占い師のもとを訪れたアメリカ人商人が、大金をはたいて日米戦争がいつ起こるのか聞くシーンがある。占い師の老婆は最終的に神の裁きを受けるのだが、悪事を働いたこと、つまり戦争で金を儲ける商人の手助けをしたことが原因となっている。ここでは戦争の裏で商売をする人間がいること、またその行為自体を批判している。同じく第六巻第一号に掲載された久米正雄「支那船」では、第一次世界大戦でドイツの軍艦を二隻も沈める大活躍を見せ、常日頃から機転の利く海軍大尉が主人公となっている。大尉は中国人に殺されそうになるも、逆に相手を抑えることに成功する。そして、面白半分には支那人を一

晩石炭庫に押し込めた。相手よりも優位に立つと、普段智慧のある行動をする人でも加虐的な気持ちになることを表している。

一九二二年は、第八巻第一号には鈴木三重吉「徒卒イワン」が、第八巻第三号（同年三月一日）では「少年少女科学」というジャンルから保井猶造の「貨幣のお話」が掲載された。日本における貨幣の歴史と日本銀行の動きのほか、戦争によってその莫大な費用のために大正六年から紙幣と金が容易に交換できなくなつたことについて紹介している。戦争がもたらすデメリットについて紙幣経済の面から否定の意見が述べられている。第九巻第三号（同年九月一日）には永島直昭「黄金の林檎」が掲載された。ある小さな国の王は、戦争のために大切な人の命や宝が失われることを悲しみ決して争おうとしなかつた。その慈悲深さに、まわりの国々も感化され戦争をしなくなり、王の徳を祝福するかのようには黄金の林檎が実る。しかし王が病死し黄金の林檎も枯れてしまうと、途端にあちこちで以前のような国の奪い合いが起こり始める。王のような人が現れれば、平和を望む人々の力で悪魔でも簡単に倒せてしまえるだろうと筆者が訴えかけるところでお話は終わる。ただ反戦するのではなく、読み手側に語りかける手法が使われている。

一九二三年は、第十巻第四号において鈴木三重吉「勇士レグルス」が掲載される。

一九二四年には、第十二巻第一号から第二号（同年一月一日、二月一日発行）に野上弥生子「アキリーズの話」が、同巻第六号には鈴木三重吉「最後の授業」が掲載される。「アキリーズの話」はトロイア戦争を題材にしたもので、無類の強さを誇るアキレスが親友の仇討をする。その死骸を陣へ持ち帰ることに成功するが、その夜、

敵であるトロイ王がアキレスの元を訪れ、せめて息子の遺体を埋葬したいと悲しみを訴えるという作品で、戦いの末に悲しみが連鎖してしまうことを主張している。

また、第十二巻第六号（同年六月一日発行）における細田源吉「白い夢」では、女王が死に悲しさを紛らわせるために戦争を企てる王に対して、国民は戦争なんて悲しくて馬鹿げたことを優しい王がするはずないと困惑する。姫が病気になるのも一向に戦争の準備をやめない王は、ある日、顔面蒼白の人々が必死になって殺し合い、そばで子供や女が泣き叫んでいるという地獄のような夢を見る。そして不思議な声を聞き、戦争を取り止める。王は人民に対する親心を忘れてはいけず、人の命を奪う事は王であつても許されないということ、また戦争は馬鹿げているという主張が強く表れた作品である。

一九二五年には、反戦作品が一つも見受けられなかつた。同年に、後々言論弾圧の手段として濫用された治安維持法が制定されている。

一九二六年、第十七巻第一巻（同年七月一日発行）には中村星湖「一本の柿の木」が掲載された。これは猿蟹合戦の続きを書いたもので、柿の木をめぐって猿と蟹が戦争をやめないため神が天罰を下す話である。神は、「あいつ等よりも知恵があつて、あいつ等よりも悪いことをしてをる人間どもを、ついでに全滅させてやる。考へてみると、人間の方が猿蟹よりもつと戦争好きだ。」と雨と風を操り、生き物たちを流していくが、一緒になつて助かったことを喜ぶ猿と蟹の姿を見て機嫌を直す。人間は戦争をしてばかりいるが、互いに助け合う事が大切だと説いている作品である。

一九二七年、第十九巻第五号には鈴木三重吉「勇士ウラター」が掲載される。

一九二八年は、四つの反戦作品が掲載される。第二十卷第二号(同年二月一日発行)掲載の小林寛「魔法の戦ひ」、同卷第三号から第四号(同年三月一日、四月一日発行)の大木篤夫「人質少年の手記」、同年第五号(同年五月一日発行)の水木京太「フランスの牛」、第二一巻第一号から第二号(同年七月一日、八月一日発行)の下村千秋「飛行将校と少年たち」である。「魔法の戦ひ」は、戦争好きな王が無駄な戦争は辞めようと思う所から話が始まる。王は今後防衛のみ行い、むやみやたらに命を奪わないことを条件に、不思議なおじさんから槍と人形を貰う。これらのアイテムによって一時は平和な時を過ごす、王は次第に平和に飽き、人を殺すようになる。するとそれら魔法の道具は消え、王は残りの生涯も前と同様、血なまぐさい生活を送ったという話である。無駄に命を奪う戦争をすることは、平和への道を永遠に閉ざすことであると主張されている。また、「人質少年の手記」では、都市連合としてローマ軍の人質に捕られた幼い少年たちの生活が描かれている。この作品は二カ月にわたって連載されたが、前半の内容は捕虜の子どもの苦しい生活しか書かれておらず、戦争によって乱暴され、家族や仲間を奪われ、肉体的にも精神的にも苦しむ子ども様子が細かく描写されている。「フランスの牛」は、ドイツ騎兵によって父を殺された娘が復讐を謀る話である。家族を殺した敵を憎悪し、復讐を誓う娘の様子がストーリーな文章で描かれているため、悲しみや憎しみの感情が読み取りやすい。これまでのお話では、主人公が戦争に対して激しい思いを抱くようになるきっかけは、家族や自分自身、つまりごく身近な人に何かが起こった時が多い。しかし、下村千秋「飛行将校と少年たち」は、それらは少し性質を異にしている。これは第一次世界大戦を題

材にしており、主人公は飛行機将校である。ドイツ軍のダントン中尉が、フランスの片田舎に不時着し、村の人々の温かさに触れるという内容である。ダントン中尉の言葉に「自分はこれからも、あゝいふ善良な人たちを敵として戦はねばならぬ。一体、戦争とはどういふことなのだ?」というのがある。戦争は国と国との戦いであり、人間同士の戦いではないと分かっている。善良な人達を敵にしなければいけないという真実を目の前に、戦争の存在意義について疑問をなげかけている。

一九二九年、まず掲載されたのは、第二十二巻第一号(同年一月一日発行)福永渙「ノアールの館」であり、普仏戦争を題材にしている。フランスを次々と打ち破り進行するドイツの歩兵連隊長グラム大佐は、レザンドレというフランスの小さな町に滞在していた。町の周りにはフランス兵が全くいないにも関わらず次々とドイツ人が殺される事件が起こり、大佐はノアールの館主人ユスタース伯爵が怪しいことをつきとめ会いに行く。伯爵は息子が拷問に苦しめられたことへの悔しさ、そして彼を失った悲しみから復讐心に燃えていた。ついに伯爵は大佐に襲いかかり首に縄をかける。しかし、息子は絞首刑に処されたが憐み深い教官によって逃がされその後不幸にも熱病で死んでしまったことを話すとき、大佐を家から追い出した。ただ敵を憎むのではなく、息子を逃がしてくれた敵の優しさを感じながらも、息子が拷問され苦しめられた事実と、亡くなった結末に悔しさを抑えきれない親の様子が描かれている。戦争に、我が子を殺された親の苦しみから戦争に対して否定的な姿勢が感じられる。水木京太「祖国の地図」は、第二十二巻第三号(同年三月一日)に掲載された。舞台となっているアルザスは、普仏戦争

の結果フランス領からドイツ領になっていたが、主人公の少年ジャックはフランス人の心を忘れなかった。敗戦によって支配されていてもなお、心までは支配されず、自文化を大切にしている様子が伺える。このように、様々な表現でもって反戦を唱えているが、戦争が悲しみを生み出すということに着目している作品、そして戦争が尊い命を奪うだけの無駄なものだと言う作品が多い。戦争や軍に対してフランスのイメージを与える戦争肯定派の作品と異なり、戦争が秘めた残酷性を伝えている。

また、「日本の子どもにとつては、第一次世界大戦はほとんど異次元の世界のものであり、『幼きものに』で戦争のことを読んで、切実な感じは持てなかった」^{二七}と言われているが、これまで詳しく見たように『赤い鳥』では、戦争によってどのようなことが引き起こされるのか、戦争の危険性について子どもに伝える作品が確かに掲載されている。それは、言論弾圧が行われ、雑誌でもって戦意高揚が行われた一九三〇代を前にしても変わらぬ姿勢を貫いている。

おわりに

雑誌『赤い鳥』は、これまでの児童雑誌の通俗性を打破し子どもの純性を保全開発するという高い意識の元、一九一八年七月に創刊された。大正デモクラシーに伴い、それまでの伝統的・画一的な子どもの教育を見直そうとする動きが社会にあったことを背景に、『赤い鳥』は教育的指導者の確保に成功する。その理由として、一つに、子ども中心主義思想と第一次世界大戦によって科学に関する需要が高まったことを受け、『赤い鳥』でも積極的に科学読物を取り入れた

ことが挙げられる。また、自然科学だけでなく人文科学など総合的な学習に努めた。二つ目に、教育現場における写生文の浸透を促す程に、綴り方教育が人々に受け入れられたことが大きい。最後に、教訓を主題にした作品が多いことも教育者に好まれた理由と言える。しかしながら、創刊された時にはまだ第一次世界大戦が続いていたこと、さらに同年にはシベリア出兵が始まったことを考えると、本誌が指導書として受容されたことを考察するにはこれだけでは不十分である。一九一〇年代から一九二〇年代にかけて反軍・反戦が多くなり、一九三〇年には言論弾圧と雑誌による戦意高揚が行われたという時代的背景がある中で、『赤い鳥』における戦争観とは一体どのようなものであったのだろうか。

『赤い鳥』の掲載作品で戦争観が強く表れている作品は、戦争や軍人を肯定する作品が六作、否定する作品が二三作であった。肯定派の作品には、軍人の勇敢さや冷静さなど、軍隊の良い部分のみを取り上げているという傾向がある。その一方、否定派（反戦）の作品は、戦争の危険性と残酷性について述べるものが多い。第一次世界大戦を題材にし、戦争の存在意義を読者に問いかける作品もある。一九三〇年代を目前に控えながらも、子どもに戦争の真実を教えることを変わらず貫いた。これは、自分の作品以外に『赤い鳥』執筆者の作品にも手を加えていた主催者・鈴木三重吉が、戦争に関しては実に中立な視点を持ち、その上で戦争の悲惨な真実を伝えていたことに要因があると考えられる。このように、『赤い鳥』は戦争観においても、子どもに対する教育的姿勢を忘れずにいたことから、教育者に求められる指導書になり得たのである。

一 『赤い鳥』創刊号（一九一八年六月）に掲載された標榜語（「モットー」とルビが振られている）には以下のように書かれている。『赤い鳥』は世俗的な下卑た子供、読みものを排除して、子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、子供のための若き創作家の出現を迎ふる、一大画期的運動の先駆である。」

二 鳥越信『はじめて学ぶ日本児童文学史』（ミネルヴァ書房、二〇〇一年四月）

三 王瑜『赤い鳥』に関する研究…大正期日本創作児童文学の側面として（同志社大学『同志社国文学』、二〇〇八年十二月）

四 注二に同じ

五 注三に同じ

六 注三に同じ

七 注二に同じ

八 足立悦男「短詩型の創作指導の意義と方法——「詩」の立場から」（全国大学国語教育学会『国語科教育』、二〇一〇年三月）

九 注二に同じ

一〇 池川敬司「鈴木三重吉——すれ違う構図（宮沢賢治——脱——領域の使者へ特集）——（宮沢賢治と近代の表現者たち）」（学灯社『国文学解釈と教材の研究』、一九九二年二月）

一一 出雲俊江『赤い鳥』綴方における鈴木三重吉の人間教育（広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部「学習開発関連領域」、二〇〇八年十二月）

一二 注一〇に同じ

一三 児玉忠「菅邦男著『赤い鳥』と生活綴り方教育」（二〇〇九年七月十五日刊『風間書房』A五判「四八四頁」）（全国大学国語教育学会『国語科教育』、二〇一〇年三月）

一四 注一二に同じ

一五 注一一に同じ

一六 井上寿彦「賢治と『赤い鳥』（東海学園大学日本文化学会『東海学園言語・文学・文化』、二〇〇二年）

一七 注一六に同じ

一八 半田淳子『永遠の童話作家鈴木三重吉』（高文堂出版社、一九九八年十月）

一九 大和田茂『社会文学・一九二〇年前後』（不二出版、一九九二年六月）

二〇 西田良子『赤い鳥』の世界とその影響（学灯社『国文学解釈と教材の研究』、一九八七年十月）

二一 相賀徹夫『日本大百科全書八』（小学館、一九八六年三月）

二二 長谷川潮『日本の戦争児童文学』（久山社、一九九五年六月）

二三 注二に同じ

二四 注四に同じ

二五 大和田茂『社会文学・一九二〇年前後』（不二出版、一九九二年六月）

二六 長谷川潮「戦争イメージの形成と反戦児童文学」（日本児童文学者協会『日本児童文学』、一九九二年三月）

二七 注二六に同じ